

## 現代におけるダンスの実践と理論の拡張

筆頭発表者： 吉田駿太郎  
連名発表者： 呉宮百合香 児玉北斗  
宮川麻理子 藤本雄二郎

### 【研究の背景】

本発表グループは、2016年より定期開催している勉強会に基づき編成された。舞踊学、なかでも現代のダンスを主な研究対象とする研究者は、現在複数の大学に点在しており、その研究手法は様々である。各大学で得た知見を持ち寄り、共通の理論的基盤を構築するとともに、若手研究者の横断的なネットワークを築くことを目的として、研究発表、文献講読、公演鑑賞会等を行ってきた。

今日「振付」の定義は拡張を続けており、その多様な実践を読み解くには、デジタルメディアの普及等、広く美学的・社会的変化を視野に収める必要がある。これまでの研究の過程で、自律性と他律性という補助線を引き、その境界線を議論することによって、現状に対する新たな見解を得られるのではないかという推論に達した。そこで本発表では、各人の研究領域における理論的動向を自律性と他律性をキーワードに整理し、事例に照らし合わせながらその有効性を検証するとともに、今後検討されるべき諸問題を提起することを試みる。

### 呉宮百合香「語る主体／語られる主体：テキストの振付作品化をめぐる」

2010年代半ばよりフランス語圏では、ダンスと言語に関して研究書が相次いで出版され、国際シンポジウムも開催されるなど、理論化への取り組みが加速している。本項では、発話を他律的要素である言語の介入と捉え、ミシェル・ベルナル（1980/2001）、ミシェル・フェーブ（1995）、リュシル・トス（2015）、メラニー・メザジェ（2018）らの論を整理したうえで、既存テキストを振付作品化した事例を取り上げて考察する。テキストに内在するリズムは、演者の身体にいかなる影響を与えるであろうか。発話という行為を振付、すなわちテキストに対する舞踊的なアプローチとみなすことは可能であろうか。

### 児玉北斗「ダンスにおける自律性と他律性：マニング／ベインズ論争を起点として」

英語圏のダンス研究にとって一つの転機となったのが1988年にスーザン・マニングとサリー・ベインズの間起きた論争である。ポスト・モダンダンスの純粹主義的自律性を論じるベインズに対し、マニングはダンスのモダニズムに他律的な社会意識を認めることを主張した。本項はこの

論争を起点に、ダンスにおける自律性／他律性の言説がその後いかなる傾向をもたらしたかを英語圏のダンス研究から読み取るとともに、現代美術における「社会的・パフォーマンス的転回」と呼ばれる文脈を参照し、新自由主義下における社会とダンスの関係性について考察を試みる。

### 宮川麻理子「エクリチュールから浮かぶダンス：知覚のシミュレーションの可能性」

ダンサーによって書かれたもの、ある身体観、感覚や身振りの探求を見ることは可能なのだろうか。この問いに関して、J. Perrin は「*Une lecture kinésique du paysage dans les écrits de la chorégraphe Simone Forti.*」(*Raison Publique*, no.17, 2012) において、G. Bolens の *Le Style des gestes. Corporéité et kinésie dans le récit littéraire* (Lausanne, BHMS, 2008) を参照しつつ「シミュレーション」と、「所与の環境を知覚した結果であるところの風景描写」を鍵としながら、分析を進める。この手法はつまり、ダンスの外にダンスを見出すことでもある。ここでは、大野一雄の「創作ノート」を例に、その可能性を探ってみたい。

### 藤本雄二郎「マース・カニングハムにおける振付手法の分析」

本項は発表者が2018年度に提出した修士論文をもとにして行う。90年代より、マーク・フランコ、スーザン・フォスターをはじめ、アメリカを中心として、モダンダンスの読み直しが行われてきた。本発表ではそれら研究の知見を踏まえ、没後10年にあたるマース・カニングハムの振付手法、特にチャンス・オペレーション、ライフ・フォームズの使用に着目する。彼のテキストやダンサーの発言をもとにして、カニングハムが考えるところの振付概念を抽出し、彼の師でもあるマーサ・グレアムの振付思想と比較検討し、カニングハムにおける振付思想の軸を明らかにする。

### 吉田駿太郎「集団的な振付における誤作動：参加型の振付実践における観客のエージェンシー」

昨今、参加型の振付実践は、社会関与とともに振付家と参加者あるいは観客との関係性の在り方について取り組んでいる。本項では、「ソーシャル・ワークス」(2011)の自律性と他律性の議論を端緒として、振付実践の参与観察のもとで発見される参加者や観客のエージェンシーを浮き彫りにする。また、「模倣の法則」(1903)やニューマテリアリズムの理論との関係性について言及することで、誤作動のパフォーマンスが、振付家と参加者あるいは観客との関係性において自律性と他律性の境界を揺さぶる共創となることを問題提起する。